



おしゃれな鼻緒が優しく足を包み履きやすい水鳥工業のげた=静岡市葵区七間町で

東京・日本橋の三越本店に、水鳥工業（静岡市葵区平和町）のげたが並んだ。

「今どきげたなんて」と言

われたが、履いた人はみんな夢中になった。とがった

音を売り場に響かせ、パン

プスで現れた若い女性。鼻

緒に素足を通すと、「気持

ちいい」とそのままげたを

鳴らして帰って行った。

「平成のげた」は洋服に合

う。漆塗りの木地や鼻緒に

花柄、水玉、ネコをあしら

うなどデザインは百種類以

上。でも、人気の秘密は見

た目より履き心地にある。

一九三七（昭和十二）年の

創業当時、国内一のげた産

地だった静岡で、げたの木

地作りを担つた。しかし、洋

装が主流になるとげたは衰

退。サンダルや靴の中底作

りに生き残りをかけたが、

安い中国産に圧倒された。

「外国に負けないものが

駿府城下町 ③

げた鳴らし、軽やかに

古の旅



撮影場所

作りたい」。水鳥正志社長（50）の頭に浮かんだ新製品は同社の原点、げただった。

昔ながらのげたは両足兼用で、足裏の形状を無視した平らな木地が、歩きにくさの原因だった。「スニーカーのように履き心地にこだわれば、絶対に売れる」。

中底作りの技術を生かし、土踏まずに添つカーブを職人が手彫りした。九三年、こだわりの詰まつたげたが世に出た。いまや年間二万

足も売れる。

日差しが春めいてきた。ジーンズに青いストライプ柄のげたを合わせよう。ゴム底だから控えめだけど、木地が出す音色は軽やか。

心が弾む。歩き慣れた道が、初めての道に変わる。

春の足音が足元から聞こえ

写真・松野穂波
文・立浪基博